



公益社団法人

日本演劇興行協会

会報—No.57

Japan Association of Major Theaters

目次

二年目を迎えた東京アート&ライブシテイク多様な試みに挑む……	3
二〇一九年度助成金受賞者インタビュー 荻野清子氏……	8
二〇一九年度助成金受賞者インタビュー 久門 隆氏……	12
法人会員・特別会員・賛助会員名簿 加盟劇場名簿 ……	16

二年目を迎えた東京アート&ライブシテイ〜多様な試みに挑む

東京アート&ライブシテイ構想実行委員会 幹事・事務局担当
(公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 参与)

大 和 滋

二年目のステップ、四つの軸で多角的に発信

日比谷、銀座、築地に見られる伝統から現代までの多様な芸術、劇場、ギャラリー、映画館の集積は、全国的にも世界にも稀にみるもので、その認識を共有し、東京五輪に向け、この地域の魅力を国際的に発信し、文化イメージを高めて行きたいとの目的でスタートしたアート&ライブシテイが二年目を迎えた。

一年目は、二つの事業の柱を立てて展開した。一つは多様な芸術集積を世界に顕在化するため劇場、ギャラリー、映画館の施設情報と催事情報の提供、芸術のまちの歴史と今を紹介するコラムで、日本語と英語によるホームページづくりに取り組んだ。

もう一つが東京アート&ライブシテイの魅力を発信する共同事業の実施である。春に開場した東京ミッドタウン日比谷が開場した「日比谷フェスティバル」との連携、銀座四丁目を挟んで居を構える、観世能楽堂と王子ホールの能楽とバロック音楽の連携企画「日仏恋愛模様」の試

み、さらに外国人観光客を意識した「東をどり」と画廊の夜会ツアー、「初めての日本舞踊―日本の文化と人を知ろう」を開催、この地域の新たな可能性を発見する事業を行った。

そして二年目の今年は、一年目の萌芽をさらに膨らませ、分野を越えた幅広い連携をすすめる発信力を強化するため、春夏秋冬四つのテーマで事業を進めてきた。

芸術をすべての人々に

〜春・日比谷フェスティバル

ゴールデンウィーク十日間、四月二十六日から五月六日(コア期間)野外の特設舞台「日比谷ステップ広場」での宮本重門演出によるオープニングショウを皮切りに公演、トーク、ワークショップが多数展開された。この催しは、演劇を中心に青空のもの、舞台、芸術に関心のある人々だけで無く、日比谷を訪れる多様な人々に今まで知らなかった多様な芸術の魅力を提供し、新たな発見を期待するフェスティバルである。



ステップ広場「レミゼラブル」



「はごろも」王子ホール

（コア期間参加者六十六万人／特設WEBアクセス五三〇〇〇件）
 今年の特徴は、アート&ライブシテイに集まる日比谷を越えた地域の劇場との連携に広がりを見せたことである。上演中の帝国劇場「レミゼラブル」や日生劇場「ヘンゼルとグレーテル」出演者のショートステージとトークには驚くほどの通行人、ファンが詰めかけ、この地域の舞台芸術パワーを発揮した。さらに参加する十劇場の制作担当者が初めて一同に会し、各劇場の魅力と集積の意義や効果をアピールするトークバトル・全員集合「劇場は魔の空間だ」、歌舞伎俳優の中村獅童さんと葛西聖司さんのトーク、さらに国立映画アーカイブで帝劇を舞台としたオムニバス映画「幸運の椅子」（一九四八年）を鑑賞し、帝国劇場での大笹義雄さんのトークなど、多角的な取り組みが行われた。二回目を迎え、多くの人々



旗頭を背負う劇場戦士たち

にゴールデンウィークの芸術祭典としての定着を確かなものとし、東京アート&ライブシテイの認知を広げる効果も発揮してくれた。

新たな挑戦「夏・はごろも」

観世能楽堂と王子ホールの連携企画第2弾は、七月二十三日、王子ホールに場を移し、能「羽衣」にクラシック音楽がどこまで踏み込むかの試みであった。

芸術的なチャレンジに意欲的な観世会のホープ武田宗典氏、愛称「まろ」、「N響の顔」として国内外で活躍するNHK交響楽団コンサートマスターの篠崎史紀氏の出会ひ。王子ホールの星野桃子プロデューサーによる、今まで見たことのない『羽衣』を夏の銀座の夜に飛翔させようとの意欲的な思いが発揮された。天女に心を奪われた漁師のように、クラシック音楽も共に舞う：加藤昌則氏の作曲による音楽、ソプラノの森谷真理氏の歌声が絶妙に切り込み、影が効果を発揮した大淵智徳氏の照明、劇場空間を立体的に生かした田尾下哲氏の演出が、新たな『はごろも』を誕生させた。また終演後のトークもこの作品の意図を明確にあぶり出す効果をもたらした。

またチラシデザインに書家の藤田雄大氏を迎え、王子ホールロビーで藤田雄大展を実施。多様な才能の出会いがこの劇場街に新たな活力をもたらすことを期待し、来年にも継承、発展をねらう企画として位置づけた。

日本の芸術を世界の人々へ

「秋・映画館で楽しむ能楽・歌舞伎・時代劇」

言葉の壁を越えて、日本の芸術の魅力を世界にどう伝えるか、これは多様な芸術が集う

東京アート&ライブシティの創立時からの重要なテーマである。昨年は、二つの単発の体験型の企画を試みたが、短期間であるため外国人観光客の集客は難しいが在日外国人のニーズがあることの確認ができた。インバウンドについてここ一年余話し合われたことは、ただ外国人向けにイベントをつくれれば良いのではなく、日本人も面白いものをつくり外国



「はごろも」トーク(左から加藤昌則、武田宗典、篠崎史紀、森谷真理)

人にも楽しんでもらうことが基本だ、そんな議論が重ねられてきた。

そこで、日本の文化を外国人に紹介する東京アート&ライブシティに相応しい、何か実験をしよう。そんな中、文化庁が国際観光旅客税を使った日本人と自然をテーマに「日本博」事業を開始したこともあり、外国人観光客への積極的な取り組みとして企画されたのが秋の事業である。

まずは、日本の伝統文化、能、歌舞伎、時代劇を映像で英語字幕付きで上映し、初心者外国人にも日本人にも日本の伝統文化を楽しむことが出来る今までに無い機会を提供すること

次に、言語の壁を乗り越える多言語ツールの開発実験として、映像音声と連動した字幕スマフォで英語、中国語(簡体字)、日本語を選択式で提供し、多言語、聴覚障害者への鑑賞機会を提供すること

そして、東劇、丸の内TOEI、TOHOシネマズ日比谷の映画館三社、日動画廊、銀座柳画廊、GINZASIXと日比谷、銀座、築地内の多様な連携の取り組みとすること

具体的には十月三日(木)〜十七日(木)までの二週余に亘る三企画、内容は以下のとおり。

①昭和の名作シリーズ「旗本退屈男」が現代にタイムスリップ。新技術を使った三か国語の上映(丸の内TOEI)。東京アート&ライブシティならではの画廊との連携企画として、太秦・東映京都撮影所で発見された市川右太衛門が身につけた豪華衣裳一四点、その選りすぐり十

を「幻の衣裳展」として日動画廊、柳画廊で同時開催。

②シネマ歌舞伎「鷺娘」坂東玉三郎出演の世界的評価の高い作品の上映前の英語解説と字幕付き上映(東劇)

③美・能・羽衣和合之舞」坂東玉三郎監督がこだわりの舞台設定を行い観世宗家が出演した4K

時代劇 丸の内TOEI2 10月3日(木)~8日(水)

東劇 10月9日(水)~10日(木)

シネマ歌舞伎 鷺娘

旗本退屈男

映画館で楽しむ 歌舞伎時代劇 能楽

毎夜半過ぎて受け継がれ磨かれてきた日本の昔々の伝統芸術。今宵の秋は、能・歌舞伎・時代劇に触れながら日本の文化に思いを馳せてみませんか！

【前売開始】旗本退屈男・賞映のみ
2019年8月31日(土)

【前売】
TKTS(伊東園駅前)/カンフェティ(日本橋-真田)/
ローチケ HIBIYA TICKET BOX/
ローソンチケット/イープラス

【劇場窓口販売】
旗本退屈男:丸の内TOEI1(上映2日前から予約開始)
鷺娘:東劇(10月9日-10日 6日18時から)
羽衣:TOHOシネマズ日比谷(10月9日からネット予約開始)

文化庁
独立行政法人日本芸術文化振興会
(2019年度日本芸術文化振興事業)

【協力】公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
TOHOシネマズ株式会社/銀座ギャラリーズ
<http://www.artandlive.net/projects/autumn2019>

TOHOシネマズ日比谷 10月11日(金)~17日(木)

秋の映画事業チラシ

映像を日本語、英語の字幕付きで映画館初上映。(TOHOシネマズ日比谷)

このような企画にどう外国人観光客(在日も含む)を誘い込むかの、多角的な試行を行った。一つは広報面で、東京都の協力を得て海外の旅行事業者への企画ニュース発信を二か月前から開始し、英語チラシ作成配布、英語での継続

的なSNS発信、会員のピクカカメラからの英語、中国語、韓国語などでの一〇〇万に近い発信、ローソンからの中国語発信を行った。

また、東京都国際交流協会を通じ東京在住の外国人関係団体、とりわけ都内大学留学生への情報発信と外国人向けの多様なアプローチを行った。

チケット販売面からもより求めやすく、前売は八月三十一日スタートし、英語対応Confitti、中国語対応アリババモール「Fliggly」でのインターネット販売を可能にし、また日本観光旅行中でもTKTS銀座店やローチケHIBIYA TICKET BOXで購入可能となる環境を整備した。

今回のインバウンドを狙った試みは動員面では成功したとは言いがたい。原因がコンテンツなのかプロモーションなのか見極めなければならぬが、インバウンド対応の入口は見えてきたと言える。

美を求めて冬・クリスマスフェスタ

恒例となっている「Xmasアートフェスタ」は、銀座界隈の画廊二十六軒が参加し十二月六日(金)~十二月十四日(土)まで開催される。昨年からは東京アート&ライブシティとの共催企画となり、初日十二月六日(金)二十一



「旗本退屈男・幻の衣装展」日動画廊

時まで開廊する「画廊の夜会」には六つのテーマで画廊巡りコースが設定され、池田達也(ベース)、丸茂睦(アコーディオン)、AKIRA(テールマジック)三組のアーティストがライブで参加し、美の空間での交感を行う。

アートを自分の部屋に飾るため作品を選ぶ楽しい体験の場を提供するこのイベントを通して、「アートのあるライフスタイル」と銀座の知られざる魅力を提案する。

進化をとげる東京のアートシーン〜二〇二〇、東京アート&ライブシティの取り組み

十一月、日本経済新聞で「塗り変わる東京劇場地図」と題した記事が紹介された。池袋駅東口に八つの劇場を擁する「Haréza 池袋」、西口の東京芸術劇場前に「劇場公園」が相次いでオープンした。これらは高野之夫区長が豊島区を舞台芸術、アニメ、映画を中心に国際文化芸術都市にしようとして進めているものである。ほかに、渋谷再開発のエンタテイメントシティ構想、劇団四季による劇場の順次開場が続く。また、東京アート&ライブシティも提案した築地市場再開発をめぐる展開も見守って行きたい。東京に文化芸術集積の複数のコアが出来つつあり、東京アート&ライブシティが二〇二〇にどのような展開を打ち出すか大事な局面を迎えている。

オリンピックイヤーに向けての共同事業の軸も見えてきた。日比谷・銀座・築地は、日本の近代化の中で培われた多様な文化的蓄積を有しており、この蓄積をさらに継承、発展させることが重要である。春の日比谷フェスティバルはさらに劇場連携として地域、分野の広がりや強め、三大映画会社が集積する強みを活かしインバウンドを意識し日本の映画資産の活用、実演芸術美術の新たな創造と美の追求を続け、まちとの連携をさらに深め、この集積の新たな可能性を発掘する取り組みを充実する展開である。

さらにもう一つは、世界に類を見ない多様な劇場、映画館、ギャラリーなど芸術が集積するまち東京アート&ライブシティ、そして各芸術

拠点の活動を全国に世界に強力に発信する基盤をつくりあげる、WEBの多言語化とアクセス数を高めるその取り組みである。

その実現のために2年間の活動を通し見えてきた課題は、今後の発展のために必要な組織体制の整備、財政基盤づくりである。事業は文化庁、日本博、東京都の支援で実施されているが、活動の持続的な発展のためには、分担金など自己資金、助成金が交付されるまでのつなぎ資金、財政管理と事業執行の組織をどう確立するか。オリンピックイヤーで充実する三年目の活動を通し結論を導く必要がある。

先日発表された「世界の総合都市ランキング二〇一九」(森記念財団都市戦略研究所)では東京はロンドン、ニューヨークに続いて四年連続三位と発表された。経済、研究・開発、文化・交流、居住など六つの視点から評価されるもので、文化面ではロンドン、ニューヨーク、パリに続いて四位であった。世界でも稀な固有性を有する芸術集積である東京アート&ライブシティの豊かな活動は、全国の人々に豊かな恩恵をもたらし、世界での認知度をさらに高め、形成されつつある東京の多様な芸術拠点ともども、都市イメージを文化面からさらに高める可能性を秘めている。

二〇二〇年を一つのターニングポイント、ジャンプの年とすべく活動を進めたいと考えている。

音楽・編曲・ピアノ

荻野清 子さんインタビュー

三谷幸喜さん作・演出の作品をはじめ、数多くの舞台上で音楽を担い、自ら出演し演奏するというスタイルで活動をしている荻野清子さん。多数の映画やドラマの音楽も手がけられ、多彩な活動を続けていらっしやいます。幼少期から音楽に親しみながら歩んできた今までの道のりや活動を振り返っていただきながら、舞台での活躍を中心に話をうかがいました。

エレクトーンから始まった

—小さい頃から音楽に親しまれていたそうですね。
四歳の頃にヤマハの音楽教室でエレクトーンを習い始めました。女の子なんで楽器の一つでも、と親はおもちゃのピアノを買ったつもりで楽器店に行ったらいいのですが、当時はエレクトーンの全盛期。デモンストレーションを見た私が「これが欲しい」と言ったらいいです(笑)。エレクトーンはピアノのような教則本がなく、いきなりコードから始めます。だから簡単に曲が弾けるようになって、自分で弾きたい曲をす

ぐに演奏できるのが楽しかったですね。

—四年生からピアノも習い始めましたが、エレクトーンのように好きな曲が弾けないから全然楽しくないし、辞めたくてしようがなくて(苦笑)。だからピアノでも勝手に耳で覚えた曲を弾くのが好きで、自分流にアレンジしたりして遊んでいました。

—高校は東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校に進まれて、その後、東京藝術大学音楽学部作曲科で学ばれますが、何か目指すきっかけがあったのでしょうか。

—音楽教室の先生に藝大作曲科の方が多かったんです。どういふところかわからないけれど、こんな素敵な先生たちになりたいと、最初は「藝大作曲科」という言葉に憧れて。附属高校があることも知ってぜひ行きたいと思いました。中学時代は部活に入らず、学校が終わると受験勉強のためにエレクトーン、作曲、ピアノのレッスンという感じでした。ほかの道を考えてという選択肢はなかったですね。

—学生生活で印象的だった出来事は。
高校に入ってからようやく洋楽も聴き始めて、

こんなものがあるのかと新たな刺激をもらった。それから、先輩に誘われてSET(劇団スパー・エキセントリック・シアター)の芝居を観に行くようになって。「こんなに面白いものがあったのか!」とハマってしまいました。三百人劇場という小さな劇場で公演をされていて、三宅裕司さんや小倉久寛さんに生徒手帳にサインをしていただいた思い出があります(笑)。学校の芸術鑑賞会で狂言や歌舞伎は観ていましたが、歌ったり踊ったり芝居したり、こういう舞台があるんだといわゆる現代のエンターテインメントの世界を初めて知って。漫画「ガラスの仮面」も愛読していたので演劇に興味を湧いてきて、生の舞台にすごく刺激を受けました。高校ではまた受験勉強をしなくてはならなかったのですが、大学に入ったらいっぱい演劇を見ようと思っていました。大学生に入ると世の中は小劇場ブームで、ちょうど青山円形劇場がオープンした頃です。劇団青い鳥、遊○機械全自動シアター、自転車キンクリート、第三舞台、夢の遊眼社……次々に観ていきました。劇団青い鳥や自転キンは女性たちの集団だったので、皆さん素敵だなと憧れましたね。

—まさに小劇場の黄金期ですね。その頃将来についてはどのように考えてらっしゃいましたか。高校生の時は映画やドラマの音楽を作りたいと思っていましたが、大学生になって多くの舞台に触れるようになってからは、舞台の音楽を作ってみたいと思うようになりました。その頃

は選曲しているなんて知らなくて、どの舞台でもオリジナルの音楽を作っていると思っていました。「将来舞台の音楽を作りたいです」なんてアンケートに書きまくって、「誰か連絡くれなれないかな」なんて思ったりしていました(笑)。

それと大学では学園祭の実行委員をやっていて、いろいろなジャンルの人たちと意見を出し合いながら一緒にひとつのイベントを作っていくという作業が楽しくて。そういったスタッフワークを経験して、ものづくりって楽しい、こういう仕事をずっとやっていけたらいいなと思うようになっていきました。

歩き始めた三つの道

—卒業後はどのような歩みをされていくのでしょうか。

まず、三つの道を歩き始めるんです。一つは大学の恩師の紹介で、映画の音楽を作る仕事をいただいて。二つ目は、同時にミュージカルにも興味を持ち始めていたので、音楽部の先輩が劇団四季にいるのを知って、全く面識がないのに名簿を見ていきなり電話をして、「稽古場を見たいです、仕事がしたいです」と。そうしたら、いらっしやいと言ってくださいっただんです。いきなりスタッフは無理だけど、オーケストラのトラ(エキストラ)を試してみないかと誘われて、三番手くらいのトラで初めて入らせてもらったのが『オペラ座の怪人』でした。市村正親さん最後のファントム役で、石丸幹二さんがラウル役で

デビューしたという、今振り返ると伝説的な公演だったんです。

そして三つ目が、劇団黒テントとの出会いです。大学の先輩の紹介で、地方公演でピアノができる人を探しているというので「行きます!」と。何も考えずに、ただやりたいという思いだけで進み始めてしまいましたが、映像とミュージカルとアングラという三つの道が、だんだんひとつに繋がっていき、今に繋がっているような感じがするんです。



劇団黒テントが『ヴォイツェック』(佐藤信演出)でアヴィニオン演劇祭に参加した際の街頭での宣伝活動の様子。アコーディオンを弾いているのが荻野氏(荻野氏提供)

—そんな中で転機となった出来事はありますか。
映画音楽は編成が大きいので、オーケストラ

レーションの経験が少ない大学を卒業したばかりの身には難しく、もっと勉強をしないと憧れだけではできないことがわかってきて。ミュージカルのオーケストラのトラの仕事も、今まであまり経験のなかったシンセイザーの扱いに行き詰まりを感じるようになっていました。そんな中、黒テントの芝居で、役者さんのセリフや呼吸と一緒にピアノを演奏することがすごく気持ちよかったです。子どもの頃あんなに嫌いだったのに、芝居と一緒になることですごく楽しくなるというか、とても表現力のある楽器だということに気づいたんですね。これが自分には一番あっていると思い始めた頃、演出の佐藤信さんが、次の芝居で曲を作ってみないかと言ってくださったんです。初めて演劇で音楽を作ったのがこの時で、台本を読んでイメージして、稽古で役者さんの芝居を見てまた考えてという作業がすごく楽しくて。その時、佐藤さんに「伴奏になっちゃいけない」と言われたことをよく覚えています。「芝居と音楽の両方が成立するものじゃないとお客さんはつまらない、ひとつの演奏会をやる気持ちでやりなさい」と。確かにオーケストラピットで演奏している時は、どこかに伴奏という意識がありました。けれどそうじゃない、対等なんだという考えはすごく新鮮で、いい言葉をいただいたなと思います。この時の公演が、作曲をして実際に舞台上でピアノを弾きながらあわせるという、今に通じるスタイルの原点になったと言えるかもしれ

ません。

三谷幸喜作品との出会い

—そういった活動を続ける中で、三谷幸喜さんとの出会いがありますね。

ミュージカル『オペピー!』で初めてお会いしました。この時は私はオーケストラのトラと稽古ピアノを担当していて、稽古場で三谷さんとお話しできる機会もあつて。そんな時に、「ピットで弾くだけじゃなくて、こういう活動もしてるんです」ってセールスしてみたり、ずうずうしくも自分が作った曲を聴いていただいたりして(笑)。それを三谷さんが思い出してくださったんですね。東京ヴォードヴィルショーの『エキストラ』(二〇〇六年)という芝居で曲を作らないかとお話をいただきました。この時は録音でしたけど、こういうふうに演出家の方とお仕事ができるんだってすごく楽しかったですね。

その後声をかけていただくようになるんですが、『コンフィダント・絆』(〇七年)は三谷さんにとって転機になった作品だとおっしゃっているのを聞いたことがあつて。それまで三谷さんは、音楽は録音やありもので選曲することが多かったそう、生の楽器を芝居とあわせることの面白さに気づいて、こういうやり方もあるんだ、と。

—『コンフィダント・絆』ではどのようにして作業を進めていかれたのでしょうか。

登場人物は有名な画家たちなのですが、舞台上で

その絵を見せるわけにはいきません。その見せない絵を「音で表現してほしい」と最初に言われたんです。それには、生演奏でしかもピアノがいいんじゃないか、ということになりました。事前に台本を読んで、ここには音楽があつたほうがいいなと考えて稽古には行くんです。でも、実際に役者さんが動くのを見て、やっぱりこの場面は芝居だけで音がないほうが素敵だとか、ここは音をつけ



『ミッドナイト・イン・パリ～史上最悪の結婚前夜～』(17年)の一場面(中央)



音楽劇『ライムライト』(19年再演)の稽古場にて

たらかもつと面白くなるなどか、そういうことはやはり直接役者さんの声を聞かないとイメージが湧かないですね。三谷さんはけっこう無謀なこともおっしゃるんですけど(笑)、それにどう応えていこうかと、稽古場で作っている時が一番楽しいかもしれません。

本番が始まると一日として同じ舞台はなくて、毎日セリフのスピードや掛け合いの間が違ってきます。それに生演奏でびったりあわせるといふ醍醐味は、一度やるとやめられないですね

(笑)。三谷さんとこのやり方を始めて十年以上経ちますが、最近はずとえば、東宝のプロデューサーさんがこのスタイルを気に入ってくださって。シアタークリエで上演した『スタンダード・バイ・ユー』(家庭内再婚)、『一四年』、『ミッドナイト・イン・パリ』(史上最悪の結婚前夜)、『一七年』といった舞台では、新たな演出家の方とお仕事する機会もいただくようになりました。

新たな出会いへの期待

―荻野さんがこの仕事を続けていく原動力とはどのようなものでしょうか。

とにかく好きだという気持ちだけはぶれていなかったと思います。「これをやりたい、なぜなら好きだから」。その気持ちだけで突っ走ってきました。もちろん大変なことや落ち込むこともありますが、自分のやりたかったことをこうして仕事にできているのは本当に幸せだと思います。

―今後チャレンジしたいことや展望はありますか。やっぱり、本場のブロードウェイに自分たちのミュージカルをもっていきたいという思いは強くあります。海外でどういうふうを受け止められるんだろうってすごく興味がありますよね。三谷さんとは今後も一緒にいきたいですし、まだ出会ったことのない演出家ともお仕事をしてみたいです。どうしても自分の中でだんだんとパターンが固まってきたので、知らない

方と出会うことで、これまでの自分にはないようなタイプの曲も作ってみたいです。自分が考えてもみなかったような発想を得て、新しい音楽を作ることができたらすごく楽しいだろうなと思います。

取材・文／高橋涼子
写真協力／東宝演劇部

プロフィール

おぎの・きよこ

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業後、舞台や映像の音楽を中心に活動。音楽を担当した主な作品は、舞台…『日本の歴史』、『子供の事情』、『シヨールガール』、『愛と哀しみのシヤロックホームズ』(以上、三谷幸喜作・演出)、『ミッドナイト・イン・パリ』(岡田恵和作・深川栄洋演出)、『スタンダード・バイ・ユー』(岡田恵和作・堤幸彦演出)、『十一ぴきのネコ』(井上ひさし作・長塚圭史演出)、『戸惑いの惑星』(G2作・演出)、映画…『記憶にございませぬ!』、テレビドラマ…『小吉の女房』(NHK)、『風雲児たち』(蘭学革命篇)、『NHK』、『神の舌を持つ男』(TBS)、NHK連続テレビ小説『純と愛』など。『ザ・マジックアワー』、『ステキな金縛り』、『清須会議』で日本アカデミー賞優秀音楽賞受賞。

株式会社イヤホンガイド

代表取締役社長 久門 隆さんインタビュー

いまや歌舞伎や文楽といった伝統芸能をはじめとする舞台公演にかかせない存在となっているイヤホンガイド。現在ではイヤホンガイドのみならず、舞台字幕マークも、LED字幕機、メガネ型字幕機やスマートフォンを利用するなど、様々な形で運用されています。創業者である先代社長がイヤホンガイドを始められた時のお話から今後の展開にいたるまで、社長の久門隆さんに色々にお聞きしました。

きっかけは飛行機の中

—今では歌舞伎公演をはじめ当たり前前の存在になりましたが、イヤホンガイドの最初の利用者は少なかつたそうですね。

一九七五年、東京の歌舞伎座で初めてイヤホンガイドを運用した際、用意した小型ラジオを利用したのはたったの七人でした。けれど、その時そばで見ていた先代の社長である父・久門郁夫は、説明を受けた方の半数が利用し、終演後に芝居が面白くなったと感想を寄せてくれたことで手応えを感じたと言います。同時解説の内容が一般に知られるようになれば、もっと利用者は増えるだろうと。その一年後に、朝日解

説事業株式会社がスタートしました。

—先代は元々、朝日新聞社の新聞記者をされていたそうですね。

そうですね。イヤホンガイドのきっかけとなった出来事も記者時代の経験からでした。フランス出張に出かけた折、飛行機で新作のフランス映画が上映されたんです。当時は吹き替えも字幕もないのでフランス語のセリフがまったくわからない。ところが隣席の同僚がすでに映画雑誌を読んで筋を知っていたので、時々耳元で囁いてくれた。その断片的な説明だけでも話がつながって楽しめたので、これを何かに活かせないかと思っただけです。

—それが電波利用と結びついていったんですね。

新聞社から東京12チャンネル(現・テレビ東京)に Outreach した父は、これからの情報社会で電波をうまく利用する手立てを考えていて、「微弱電波を使って決まった範囲内に流す媒体を作っては」という助言を友人からもらったんです。それでまず地下鉄で試験車両を走らせて、微弱電波を出し放送する実験をして成功しました。「メトロラジオ」として事業化に乗り出そうとした時、オイルショックが起こりそのままたち消えになってしまいました。次に実験したのが競馬場の場内放送です。ところが配当金の不正騒ぎで大騒乱が起きてしまい、小型ラジオを渡したらお客さんたちが投げて危険だと、実施寸前



で中止になってしまったんです。

歌舞伎座での運用開始

—その後、歌舞伎座でのイヤホン解説に目を向けられますね。

それからサッカー、プロレス、ゴルフ、相撲などにもあたり、国立劇場にも計画を持っていきましたが、歌舞伎は直接体験するものだからと当時は話が進まなかったそうです。そこで、商業劇場だし啓蒙的なイヤホン解説に興味はないだろうと思っていた歌舞伎座に話したら、「日本人向けに日本語で解説したい」という父の思いに、当時の支配人・堀内森夫さん(後に松竹株式会社専務)が賛同してくださいました。そこからテストを繰り返して、昭和五十年十一月から本放送に入りました。

父は社会部の記者だったので、物事の真実を追求する相当なりアリストでした。だから、目の前にあるものがわからないのにありがたがり、自分のプライドでわかつたふりをすることが嫌いな人だったんです。歌舞伎も素晴らしいものだとありがたがるだけで、じゃあどこがいいのかと聞いてもわからない、観ても理解できないという人が多いのはもったいない。何百年も残っているのだから良いものに違いなく、内容がわかれば誰もが楽しめるはずだと。フランス行きの飛行機での同僚のように、歌舞伎通の友人が隣で囁いてくれるような、そんなイヤホン解説ができれば面白いのではないか、

と考えたんです。

歌舞伎の演目には、歌舞伎俳優、演出家、脚本家の何十年、何百年分の想いが込められていて、セリフひとつにもこだわりが詰まっている。でも初めての方には全然わからないですよ。ところが少しでも背景がわかってくると、「ああ、このセリフはあの人の対してのオマージュなんだな」とか、「だからもしかしたらこの演出はあの人に似てるのかな」など、どんどん広がりが生まれていって、観ている方は俄然面白くなってくる。そうすれば次も観てみたいという気持ちになりますよ。

時代とともに変化しているのは、昔の言葉を知らない層が増えてきたことです。今の若い方は、たとえばキセル、へっつい、長屋と言っても何のことかわからない。解説者たちと話し合いつながり、時代にあわせたガイドになるようにと日々考えています。

最近よく聞く話があるのですが、若い方が海外へ出ると、向こうの方は自身のルーツや文化を皆しつかり語ることができる。けれど自分たちは日本文化を何も知らず何も話せなかったとショックを受けて帰ってくる、というんです。グローバルな世界になればなるほど日本の文化を知ることが必要になってくるし、そういった時に歌舞伎に興味を持っていただき、その入り口にイヤホンガイドがなれたらと思うんです。

—イヤホンガイドだけではなく、早い時期から舞台字幕も手がけられていますね。

昭和五十年代から招聘もののミュージカル、オペラも手がけるようになりました。最初はイヤホンガイドで翻訳をつける形でしたが、徐々に字幕へ移行していきました。我が社では舞台字幕のことを「Gマーク」と呼称していますが、現在ではLEDやプロジェクターを利用するスタイルがあつて、舞台の脇などに設置します。もう一つはパーソナル字幕機で、必要な方に貸し出して客席で使っていただきます。

けれど、どうしてもお客様の視線は字幕と舞台の間を行き来することになり、集力が分散してしまふ。お客様としてはもつと目の前の舞台とつながりたいと思われているのではないかと



多くの舞台公演で愛用者の多いイヤホンガイド

と考え、より没入感を感じていただきたくて運用を始めたのが、メガネ型の字幕機(スマートグラス)です。劇団四季の『ライオンキング』『リトルマーメイド』で、このスマートグラスを使用した多言語字幕サービスを運用しています。これによってお客様は舞台から目を離さずに観劇することができ、聴覚障がい者の方の観劇支援にも活用されています。ただ、まだけっこう重量があるんですね。これからどんどん改良されていくと思います。

イヤホンガイドの再定義

「久門社長は、どのようなきっかけでイヤホンガイドで仕事をやるようになったのでしょうか。」

私は現在十五年目ですが、先代である父はこの会社は一代限りだと言っていました。兄も研究者で全然違う分野に進んでいますし、私はIT系の商社に十一年、ベンチャー企業に四年在籍していました。でもやはり父のことは気になりますのでベンチャー企業に転職する際、父に「どうするの?」と聞いたら、「おまえに何か関係あるのか?」と(笑)。ところが、それから二年経ち、新たな事業部の立ち上げで大阪に転勤したところ、「いつまでそっちにいるんだ」と父から頻りに電話がかかってくるようになって。何かと思えば、「会社を手伝わないか?」と。

私は父が四十五の時の子供なので、父親が現役でバリバリ働いている姿を見ていません。当然仕事の内容もよくわからず、父の生き様とい

うか、この人はどういう思いで仕事しているのかを知りたくなった。それで一緒に仕事をしてみたいと思ったんです。前職に目処がついた二〇〇四年三月から、共に働くことになりました。八十六歳で亡くなるまでの四年間でしたが、父親はこういうことを考えていたんだということがよくわかったし、アプローチが違うだけで想いは一緒でしたから、喧嘩をしてもある意味建設的な喧嘩でした。一緒に仕事ができても本当によかったと思っています。○五年には会社名を株式会社イヤホンガイドに改称し、○六年、父は長年の活動に対して文化庁長官表彰をいただきました。翌年には創業三十周年のパーティーも行うことができました。

「社長に就任されてから、何か転機になったことはございますか。」

父の代では、イヤホンガイドとは「解説をするもの」でした。けれど、仕事を引き継ぎ改めて今後のことを考えた時に、イヤホンガイドを定義し直したんです。それは、「気づきを与えるツール」ということ。そう定義し直したことで、何にでも通用すると思えるようになったのは大きかったですね。イヤホンガイドをご存知の方は「歌舞伎や文楽のね」とおっしゃいますが、舞踊でも、現代劇でも、博物館だっていいんです。そういう考えから、これまでお付き合いのなかったミュージカルやバレエの分野でも使っていたくようになりましたし、能楽でも「能サポ」といって、端末をお貸ししたり、お



劇場での字幕解説サービスの様子

お客様のスマートフォンにダウンロードして使うタイプの字幕コンテンツに繋がっていききました。

新時代に向けて

「受け身の「解説」ではなく、「気づき」によってお客様が能動的に舞台と繋がっていきける、そのお手伝いということですね。」

はい。あくまでも主役は目の前の舞台であって、私どもの役割はいかに気づきを与え、お客様自身が感動を見つけていくかなんです。先ほどから表示器のお話をしていますが、メガネ型字幕機でもスマートフォン型でも、表示器はな



ポータブル字幕機では、字幕ガイドアプリ・G-marcを利用する

んでもいいんです。バックヤード側の提供システムは全て共通で、今日はLEDの字幕で、今日はスマートフォンを使った音声でということができるので、ニーズ次第で表示器はいかようにも考えることができます。舞台とそれを楽しもうとするお客様、そのアナログな主役同士をうまくデジタルでつないでフックをかけることができますれば、また観たいという方が増えて観劇の裾野もどんどん広がっていくと思うんです。

— 今後も様々な展開が期待できますね。

歌舞伎のイヤホンガイドという知名度は上がりましたが、逆に難しい古典演目のために使うものだと思っている方もいらっしやいます。け

れど、スーパー歌舞伎Ⅱ『ワンピース』でも、八月南座超歌舞伎でもイヤホンガイドをつけたのですが、お客様の反応がすぐよかったです。つまり古典に限らず、目の前で観ている舞台に込められた演出家や役者の意図などちよっとしたヒントを与えることによって、リテラシーが上がれば、シヤッチするもの、吸収するものが増えるんですね。改めて、イヤホンガイドや字幕は、説明するツールではなく気づきを与えるツールなんだと手応えを感じました。

最近、町おこしの一環として演劇をやる自治体が多いのですが、それならイヤホンガイドで街案内を一緒にやってみよう、なんていう取り組みもしています。演劇でも映画でもなんでもいいんです、具体的には私たちが提案して考えていきますから、業界のみなさんにはぜひ面白い使い道を考えていただきたい。新たな可能性がまだまだイヤホンガイドと字幕にはあると思っています。

取材・文／高橋涼子
写真協力／株式会社イヤホンガイド

■株式会社イヤホンガイド

一九七五年十一月、久門郁夫(前社長)がイヤホンガイドを発案・開発。朝日新聞社と歌舞伎座の協力を得て一年間営業を含めた試験放送開始。七六年八月、朝日解説事業株式会社設立、本格放送開始。同年十月国立劇場の歌舞伎公演、七七年二月新橋演舞場の歌舞伎公演で放送開始。七九年三月、来日の京劇・外国演劇で日本語解説開始。八〇年十二月、国立劇場の文楽公演で放送開始。八一年五月、オペラ・バレエ公演で日本語解説開始。八二年三月、歌舞伎座で英語版解説放送開始。八六年六月パリ歌舞伎公演でフランス語解説放送実施。以後、歌舞伎外国公演は現地語で同時解説放送を行う。九五年七月新電光字幕Gマーク機が完成し、九月ミュージカル『エル・フィリ』でデビュー。九六年五月小澤征爾指揮による新日本フィル・オペラ『蝶々夫人』に登場。二〇〇〇年九月フランス・リヨン歌舞伎公演に登場、海外初進出。〇五年一月社名を株式会社イヤホンガイドに改称。〇九年九月無線のポータブル字幕機のテスト運用開始。同年十一月博物館向けイヤホンガイドが稼働開始。一三年四月新開場歌舞伎座にてパーソナル字幕機「字幕ガイド」運用開始。一七年度経産省新連携事業に認定。一八年より劇団四季公演、能楽公演で新連携事業サービス稼働。

公益社団法人 日本演劇興行協会 会員名簿

法人会員				
松竹株式会社	代表取締役社長	迫本 淳一	104-8422	東京都中央区築地4-1-1 東劇ビル
株式会社新歌舞伎座	代表取締役社長	川瀬 昌弘	543-0001	大阪府大阪市天王寺区上本町6-5-13
株式会社イヤホンガイド	代表取締役社長	久門 隆	104-0061	東京都中央区銀座3-14-1 銀座3丁目ビル5F
有限会社大久保化学工業	代表取締役	大久保政彦	103-0008	東京都中央区日本橋中洲4-15
松竹衣裳株式会社	代表取締役社長	海老沢孝裕	104-0041	東京都中央区新富2-2-8
松竹ショウビズスタジオ株式会社	代表取締役社長	飯島 義裕	104-8422	東京都中央区築地4-1-1 東劇ビル6階
株式会社タカサゴ	代表取締役社長	新倉 康榮	171-0031	東京都豊島区目白1-1-1
東宝株式会社	代表取締役社長	島谷 能成	100-0005	東京都千代田区有楽町1-2-1
株式会社博多座	代表取締役社長	貞刈 厚仁	812-8615	福岡県福岡市博多区下川端町2-1
藤浪小道具株式会社	代表取締役社長	野村 哲朗	111-0032	東京都台東区浅草6-2-6
株式会社御園座	代表取締役社長	宮崎 敏明	460-0061	愛知県名古屋市中区栄1-6-14
株式会社明治座	代表取締役社長	三田 芳裕	103-0007	東京都中央区日本橋浜町2-31-1
株式会社WOWOWコミュニケーションズ	代表取締役社長	大高 信之	220-8080	神奈川県横浜市みなとみらい3-3-1 三菱重工横浜ビル18F

特別会員				
公益財団法人都民劇場	理事長	糟谷 治男	104-8077	東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル6F

賛助会員				
有限会社アトリエ・カオス	代表取締役	田中 義彦	156-0056	東京都世田谷区八幡山1-1-15
鶴飼興業株式会社	代表取締役社長	神谷 武彦	460-0008	愛知県名古屋市中区栄2-1-1 日土地名古屋ビル4階
株式会社エス・ピー・ディ明治	代表取締役社長	井田 浩司	103-0007	東京都中央区日本橋浜町2-31-1 明治座アネックスビル
大阪府公衆浴場組合	理事長	浦田 充	543-0071	大阪府大阪市天王寺区生玉町9-3
株式会社歌舞伎座	代表取締役社長	武中 雅人	104-0061	東京都中央区銀座4-12-15
歌舞伎座舞台株式会社	代表取締役社長	荒牧大四郎	104-0061	東京都中央区銀座7-15-5 共同ビル4階
有限会社関西照明設備研究所	代表取締役	河本 康夫	552-0007	大阪府大阪市港区弁天3-15-9
有限会社菊地商事	代表取締役	菊地 正夫	162-0834	東京都新宿区北町40番地
熊谷印刷株式会社	代表取締役社長	石塚 英生	104-0045	東京都中央区築地3-3-12
三精テクノロジーズ株式会社	代表取締役	良知 昇	532-0003	大阪府大阪市淀川区宮原4-3-29
指定管理者アゼリアプロジェクト(サンビアン川崎)	館長	足立 公司	210-0011	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2
新橋演舞場株式会社	代表取締役会長	迫本 淳一	104-0061	東京都中央区銀座6-18-2
成旺印刷株式会社	代表取締役社長	江原 浩一	101-0047	東京都千代田区内神田2-14-6 神田アネックスビル
株式会社総合医学社	代表取締役	渡辺 嘉之	101-0061	東京都千代田区三崎町1-1-4
たつた舞台株式会社	代表取締役	立田 豊	542-0071	大阪府大阪市中央区道頓堀1-9-19 大阪松竹座内
株式会社テクノ三紫	代表取締役	小野 雅司	103-0008	東京都中央区日本橋中洲4-15 アーバンローズ日本橋401
東京帝国警備保障株式会社	代表取締役社長	島居 真文	170-0005	東京都豊島区南大塚3-4-1 オーエスビル6F
株式会社東宝コスチューム	取締役社長	國井 祐嗣	151-0043	東京都渋谷区世塚3-22-3
東宝ファシリティーズ株式会社	代表取締役社長	高橋 昌治	100-0006	東京都千代田区有楽町1-7-1 有楽町電気ビル
東宝舞台株式会社	代表取締役社長	榊原 昭夫	339-0025	埼玉県さいたま市岩槻区釣上新田1048-1
TOHOリテール株式会社	代表取締役社長	加藤 芳章	104-0042	東京都中央区入船2-1-1 住友入船ビル1F
株式会社トーショー	代表取締役	岩田 敏雄	187-0004	東京都小平市天神町3-10-3
社陵印刷株式会社	代表取締役社長	大野 志郎	104-0045	東京都中央区築地2-3-4 築地第一長岡ビル9F
学校法人野辺野学園	理事長	山中 理	514-1121	三重県津市久居二ノ町1855
有限会社藤井照明	取締役社長	堀田 道郎	464-0075	愛知県名古屋市中区千種区内山3-1-15
株式会社宝円堂	代表取締役	阿多 亨	104-0041	東京都中央区新富1-5-5
株式会社宮澤商店	取締役社長	宮澤 武	111-0032	東京都台東区浅草6-5-1
明治座事業株式会社	代表取締役社長	三田 芳裕	103-0007	東京都中央区日本橋浜町2-31-3
明治座舞台株式会社	代表取締役社長	北村 純一	103-0007	東京都中央区日本橋浜町2-31-3
株式会社山二製材所	代表取締役	児玉 正光	454-0012	愛知県名古屋市中川区尾頭橋通1-25

公益社団法人 日本演劇興行協会・加盟劇場名簿

歌舞伎座	松竹株式会社	橋本 芳孝	104-0061	東京都中央区銀座4-12-15	03-3545-6800
新橋演舞場	松竹株式会社	真藤 美一	104-0061	東京都中央区銀座6-18-2	03-3541-2600
サンシャイン劇場	松竹株式会社		170-8630	東京都豊島区東池袋3-1-4文化会館	03-3987-5281
帝国劇場	東宝株式会社	阿部 聖彦	100-0005	東京都千代田区丸の内3-1-1	03-3213-7221
シアタークリエ	東宝株式会社	柴田 淳	100-0006	東京都千代田区有楽町1-2-1	03-3591-2400
明治座	株式会社明治座	野田 勇樹	103-0007	東京都中央区日本橋浜町2-31-1	03-3660-3939
御園座	株式会社御園座	森 孝治	460-8403	愛知県名古屋市中区栄1-6-14	052-222-8201
新歌舞伎座	株式会社新歌舞伎座	大塚 博之	543-0001	大阪府大阪市天王寺区上本町6-5-13	06-7730-2121
大阪松竹座	松竹株式会社	千田 孝	542-0071	大阪府大阪市中央区道頓堀1-9-19	06-6214-2211
南座	松竹株式会社	藤田 学	605-0075	京都府京都市東山区四条大橋東詰	075-561-1155
博多座	株式会社博多座	山本 哲郎	812-8615	福岡県福岡市博多区下川端町2-1	092-263-5858

発行日 2019年12月

編集・発行 公益社団法人 日本演劇興行協会 事務局

発行所 東京都中央区銀座1丁目2番8号セントラルビル TEL. 03(3561)3977